

研究ノート

保育者養成に必要な造形的体験とは何か

—「造形的な見方・考え方」につながる
領域「表現」に関する専門的事項—

楨 英子*

問題と目的

1. 幼児教育と教科教育との接続

平成29年（2017年）に告示された『保育所保育指針』¹⁾では、その内容に関して『幼稚園教育要領』²⁾と『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』³⁾との共通化がより一層はかられ、保育所も幼児教育を行う施設であることが明記され、幼児教育機関として積極的に位置づけられた⁴⁾。また、『幼稚園教育要領』には前文が加えられ、改めて幼稚園が『教育基本法』第1条に定める目的のもと、学校教育のはじまりとしてその基礎を培うことが求められると明記された。第1章総則においては、初等中等教育を通じて育成を目指す資質・能力の三つの柱とも関連づけられ、幼児教育でその基礎が培われ、小学校以上では教科等の指導により成長していくことが明示された。また、いずれの法令（以後、前述の3つの法令を「3法令」と記す）にも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、全体として、幼児教育と小学校以降の教育との接続がより強調されたといえるだろう。こうした改訂の方向性が、保育における「子どもの最善の利益」の保障の理念に基づいて具体化されるためには、幼小接続の意味を明確にし、保育者養成の段階において何を学ぶべきかを、改めて検討する必要があるだろう。

同じく平成29年に告示された『小学校学習指導要領』⁵⁾においては、長年その育成を目指してきた「生きる力」をより具体化し、育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうと

*総合福祉学部 教授

する「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の三つの柱に整理するとともに、各教科の目標や内容についても、三つの柱に基づく再整理が行われた。

三つの柱の幼小接続に関しては、幼児教育において育みたい資質・能力の「知識及び技能の基礎」は、「遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何がわかったり、何ができるようになるのか」であるとされており、「幼児教育において育みたい資質・能力の整理」(図1)⁶⁾によると、幼児期に獲得した「知識及び技能の基礎」が小学校以上の「知識・技能」に直結するのではなく、遊びを通しての総合的指導によって「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」と一体的に育まれたものが全体として小学校以降の資質・能力の基盤となるという考え方が示されている。これは、幼小の接続を考える上で重要な視点であるが、一方で、5領域による総合的指導から教科教育への段差をどのように埋めるのかという課題も残される。

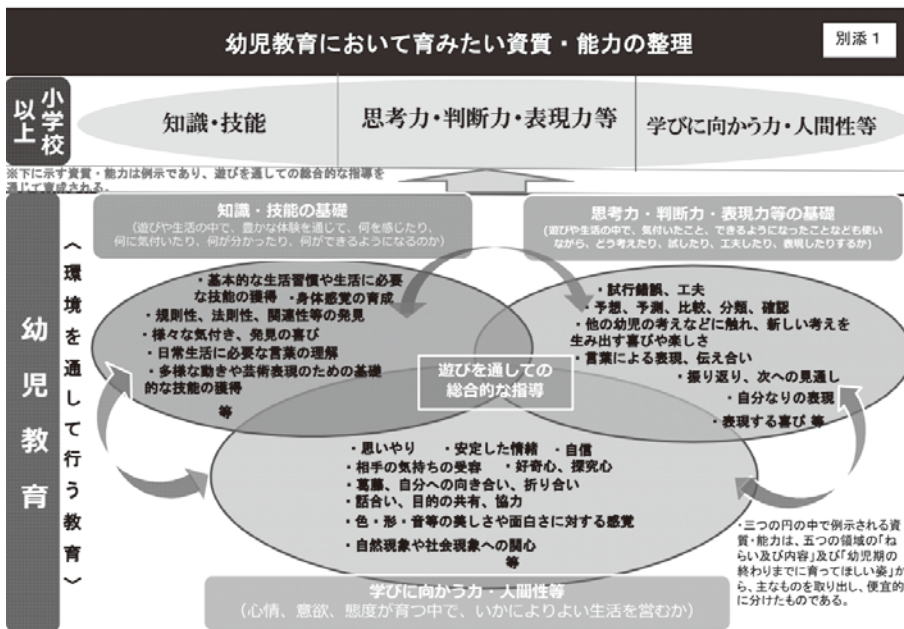


図1 幼児教育において育みたい資質・能力の整理 (文部科学省)

2. 「見方・考え方」の視点による接続

幼児教育と教科教育とをつなぐもう一つの視点について考えてみたい。「学習指導要領解説」第一章総説の「改定の経緯及び基本方針」には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進の方向性が示され、そこには、「オ深い学びの鍵として「見方・

考え方」を働かせることが重要になること。」と書かれている⁷⁾。各教科等の「見方・考え方」に関する記述によると、それは「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方で、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、児童がその「見方・考え方」を学習や人生において自在に働かせることができるようにすることに教師の専門性が発揮されることが求められている。

このような各教科等の「見方・考え方」は、「新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、既に身に付けた資質・能力の三つの柱によって支えられた「見方・考え方」が、習得・活用・探究という学びの過程の中で働くことを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりし、それによって「見方・考え方」が更に豊かなものになる、という相互の関係にある⁸⁾。その基礎を培う幼児教育において、これらの「見方・考え方」は、どのように位置づけられているのであろうか。

幼児教育における「見方・考え方」については、「幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすること⁹⁾」であり、「様々な体験等を通して培われた「見方・考え方」は、小学校以降において、各教科等の「見方・考え方」の基礎になるとともに、これらを統合化することの基礎ともなる」とされている。つまり、幼児教育には、各教科等で獲得する「知識・技能」等との直接的な連続性は求めないものの、遊びや生活の過程で培う「見方・考え方」は各教科の学びを支える基礎となることから、それを培う豊かな体験と支えるための環境作りが求められていると考えられる。この幼児教育における体験の豊かさや環境の多様性の背景となるものとして注目したいのが、各教科等の「見方・考え方」である。

3. 「造形的な見方・考え方」による接続の視点

図画工作科において、それは「造形的な見方・考え方」である。「学習指導要領解説〈図画工作編〉」によると、「造形的な見方・考え方」とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと¹⁰⁾」であり、以下のような解説が加えられている。

「感性や想像力を働かせ」とは、表現及び鑑賞の活動において、児童が感性や想像力を十分に働かせることを一層重視し、それを明確にするために示している。「感性」は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なものである。「想像力」は、…(略)…児童が思いを膨らませたり想像の世界を楽し

んだりすることが重要であることから、感性とともに示している。「対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え」とは、材料や作品、出来事などを、形や色などの視点で捉えることである。「造形的な視点」は、図画工作科ならではの視点であり、図画工作科で育成を目指す資質・能力を支えるものである。具体的には「形や色など」、「形や色などの感じ」、「形や色などの造形的な特徴」などであり、学習活動により様々な内容が考えられる。「自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」とは、児童が心の中に像をつくりだしたり、全体的な感じ、情景や姿を思い浮かべたりしながら、自分と対象と事象との関わりを深め、自分にとっての意味や価値をつくりだすことである。これは、活動や作品をつくりだすことは、自分にとっての意味や価値をつくりだすことであり、同時に、自分自身をもつくりだしていることであるという、図画工作において大切にしていることも示している。

このように解説されている「造形的な見方・考え方」は、図画工作科の深い学びの鍵となるものであり、「造形的な視点」で捉えて表すことが豊かな体験であることを示している。活動や作品作りは意味や価値の創造体験であり、「自分自身をもつくりだしている」という考え方は、幼児の表現の理解に欠かせないものであり、幼児期に造形表現を豊かに展開する根拠ともなる考え方である。

「造形的な見方・考え方」と幼児教育との関係性については、領域「表現」が、感性や表現力、創造性を豊かに養うことを指向しており、「ねらい」に、感性、感動、イメージという語句があることから、連続性が認められる。「内容」についても、「(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」をはじめとする多くの項目において、つながりがある。また、各領域のねらい及び内容に基づく活動を通して育まれる姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関しても、「豊かな感性と表現」として「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方に気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」姿が示されている。この姿には、感性、素材や表し方への気づき、自分の感じ方、楽しさや喜びの重視など、「図画工作科の目標」¹¹⁾に示されている「造形的な見方・考え方」を働かせて育まれる資質・能力への連続性が認められる。以上から、幼児期に「造形的な見方・考え方」を見通した体験を重ねることには、教科としての「図画工作科」との接続に必要と考えられる。

また、幼児教育における「見方・考え方」と対照してみると、主体的な関わりや感じることや想像すること等の共通点がある一方、「造形的な見方・考え方」は、「造形的な視点」で捉えることで、自分のイメージや創造的な態度を育むのが特徴的であり、感性や創造性の育成を支えるものであることがわかる(表1)。

表1 「造形的な見方・考え方」と幼児教育における「見方・考え方」の接続

	「造形的な見方・考え方」	幼児教育における「見方・考え方」
対象や事象（環境）との関わり方	感性や想像力を働かせ	それぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね
対象や事象（環境）の捉え方	対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え	遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして
探究の仕方	自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと	諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり思い巡らしたりすること

(対応する観点から筆者作成)

幼児期の様々な体験等を通して培われた「見方・考え方」が、小学校以降の各教科等の「見方・考え方」の基礎になることから、環境を捉える「造形的な視点」に気づき、自分のイメージや創造性を育む体験を重ねることは、「表現」領域の観点からだけでなく、幼児教育と小学校教育の円滑な接続にも必要であると考えられる。同様に、他教科で培う「見方・考え方」につながる豊かな体験が展開されることが期待される。

以上から、幼児教育と小学校教育との接続は、幼児教育で培う「見方・考え方」における関わり方や捉え方の多様性を、小学校以降の各教科等の「見方・考え方」を見通すことによって実現するという方向性が見えてくる。知識・技能の系統性ではなく、「見方・考え方」を働かせる体験の連続性から考えるのである。具体的には、計画の立案や教材の工夫や環境構成を行う際に、各教科等の「見方・考え方」を手がかりにするということが考えられる。これは、教科教育の前倒しではなく、「幼児教育の見方・考え方」と各教科の「見方・考え方」の円滑な接続の視点である。こうした視点は、幼児の遊びの中に「学習や人生において自在に働かせることができる」ようになってほしい「見方・考え方」の萌芽を読み取り、それを支えるという保育行為につながり、偏った知識や技能を付与する保育を回避する根拠ともなる。

このように考えると、保育者の資質能力として求められる専門性には、小学校以降の教育で培う各教科等の「見方・考え方」の理解が含まれることになる。平成29年に示された「教職課程コアカリキュラム」¹²⁾においても、「保育内容の指導法」の到達目標に「小学校の教科等とのつながりを理解している」が明記されている。以上から、保育者養成の課程に「造形的な見方・考え方」を理解する造形関連授業は必要となる。

4. 保育者養成における造形関連授業の課題

平成31年から新しい教職課程がスタートし、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設され、「教科に関する科目」が「領域に関する専門的事項」に変更された¹³⁾。これま

での教職課程が見直された背景として、「教科に関する科目」と「保育内容の指導法」との関連が見えにくい状況にあったことが指摘されている¹⁴⁾。「教科に関する科目」が小学校教諭養成課程と共通科目であるために関連づけにくい実態があったことが推察されるが、一方で、資質・能力の三つの柱は、幼・小・中・高を通して伸びていくものとされている。すでに述べたように、その円滑な接続のためには、資質・能力の育成を支える各教科等の「見方・考え方」についての理解が必要と考えられるが、「教科に関する科目」がなくなり、小学校の教科教育に関して学ぶ機会は、「領域に関する専門的事項」の科目以外にはない。

「領域に関する専門的事項」については、「領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする」とされているが、各領域の背景となる学問領域が何であるかは明示されておらず、小学校の教科との対応も示されていない。また、「領域に関する専門的事項」は、「幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる」¹⁵⁾とされており、「各領域に関連する学問分野を専門とする者が担当する科目」としていることから、学問的背景をもつ小学校以降の教育を見通すことも期待されていると考えられる。さらに具体的なカリキュラムについては、保育教諭養成課程研究会からモデルカリキュラムが示されているものの、「各大学等において、領域に関しての専門的知識・技能等を修得できるよう工夫すること」が求められており、修得内容の明確化は喫緊の課題といえるだろう。

その解決には、領域の学問的な背景や基盤となる考え方の明確化が必要である。「表現」領域の背景となる主たる学問領域である「芸術」は、造形美術や音楽をはじめ、演劇・舞踊等の総合芸術など幅広い。そのため、各分野の基盤となる考え方を学ぶことが領域の背景の理解につながるとは考えられない。それどころか、学生たちが過去に出会ってきた芸術科目の多くは、各分野の専門的な知識や技能の修得を促す傾向があったことが推察され、表現の意義の理解に至らないだけでなく、表現することや芸術に対する苦手意識や抵抗感を植え付ける場にすらなっていたという現状がある。

保育者及び教員養成に携わり、保育造形や図画工作を担当している養成校の教員の多くは、学生たちの美術嫌いに直面し、教員自身が専門とする芸術分野の教授が有効ではないことを自覚し、苦手意識に関する調査を行い、対策を講じている。例えば、授業開始前の診断的評価に当たるアンケートにおいて、半数以上の学生が図画工作科や美術科に対する苦手意識を持つと答えていること等に対し、実技の演習を中心に据えた独自のカリキュラムを開発した報告がある¹⁶⁾。また、「中学生が嫌いになる教科」第一位は「美術」という報告もある¹⁷⁾。末永(2020)は、それを「技術・知識」の偏重型授業スタイルによるものと分析し、13歳は「美術」に強く苦手意識を抱くことになる「分岐点」であり、「美術」で学ぶべきだったのは「作品の作り方」ではなく「アートのもの考え方=アート思考」であると主

張している。さらに、美術は「正解を見つける力」ではなく自分なりの「答えをつくる力」を育むものとし、「自分だけのものの見方・考え方」を体験する授業を提案している。その多様性を認め合う経験は、子どもの「表現」を支える専門性の育成に必要なプロセスなのではないだろうか。

表現に対する抵抗感を軽減し、表現を支える側に立つ意欲を育むのは、表現の意味の理解と喜びや葛藤などの情動を伴う表現体験である。「見方・考え方」の接続という観点からも、背景となる学問領域や芸術分野に触れる学びの機会が必要である。特に、多様性の容認と世界の見方・考え方の拡大を軸とし、自分の感じ方を深める造形関連授業は、領域「表現」の深い理解につながると考えられる。表現に対する肯定感を高め、乳幼児期の素朴な表現を支える専門性を獲得するためには、領域「表現」に関する専門的事項として、どのような造形的体験が必要とされるのであろうか。それを明確にするためには、これまで「教科に関する科目」として行ってきた授業を振り返る必要があるだろう。

5. 「教科に関する科目：図画工作」による保育者養成の現状

本学の造形関連科目の現状についてである（表2）。

表2 教職課程における造形関連科目（令和2年度）

現在の区分	保育士・幼稚園教諭養成課程	小学校教諭養成課程
教科に関する科目（半期）	図画工作*	図画工作
教職に関する科目（半期）	保育内容（造形表現）	初等教科教育法（図画工作）

*領域に関する専門的事項「こどもと表現」に移行予定

造形関連科目に選択科目はなく、保育者及び小学校教諭志望学生が受講できる授業回数は30回である。筆者は、上記の全科目を担当しており、「図画工作」は、教職課程認定基準の改正による授業科目の変更前の「教科に関する科目」であるため、「保育内容（造形表現）」と「初等教科教育法（図画工作）」の両授業との接続を念頭においている。そのため、「造形的視点」と共に、表現に対する理解と肯定感を育む授業デザインを行ってきた。

筆者は、造形関連科目が、環境を通して行う幼児教育の専門性のために提供できる学びは、主に子ども達を取り巻く「環境のよき作り手となるための学び」と学生自身が「よき環境となるための学び」であると考えている。

まず「環境のよき作り手となるための学び」とは、具体的には、多様な素材や用具を扱い、触覚・視覚を中心とした諸感覚を存分に働かせて、物的環境構成力を獲得することである。そのためには「造形的な見方・考え方」を働かせる際に用いる「造形的な視点」の修得

が有効である。情動を伴う造形体験から得られた「知識・技能」と「表現力」は、幼児の特性との関連づけによって保育内容の指導法を学ぶ基礎となる。

また、「よき環境となるための学び」は、人的環境としての育ちを目指している。保育者は、多様性や新奇性を認めるだけでなく、表現するモデルとしての役割も大きいことから、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の「豊かな感性と表現」の項目で描かれている姿を体感しておきたい。そのためには、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」授業デザインが必要である。自分のイメージで意味や価値をつくり出す「造形的な見方・考え方」が「幼児教育における見方・考え方」にそって修得できる学びが得られれば、乳幼児期の素朴な表現を支えるよき人的環境となることが推察される。

さらに苦手意識の払拭を視野に入れると、スキルの修得と肯定的なフィードバックによって自信を得る体験が必要となる。そのため、学習グループ内に、自己を表明し合える関係性と認め合う風土が生まれ、表現の喜びが感じられるような授業デザインを行った。デューイ (John Dewey 1859-1952) の教育思想に基づいた「グループプロジェクト」は、探究過程に相互作用とコミュニケーションを組み込む学習方法であり、学習参加が積極的になる効果が認められている¹⁸⁾。

6. 研究目的

本研究では、以上のような考え方に基づいて行ってきた「教科に関する科目」である「図画工作」から、領域の枠組みでありながら教科教育への接続に関する学びを担う「領域に関する専門的事項」への移行に際しての課題を検討する。具体的には、「見方・考え方」の接続と保育者の資質育成の観点から、改善点を明確にし、保育者養成において体験すべき造形美術に関する授業とはどのようなものなのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

「図画工作」の授業内容を具体的に示し、内容の分析による評価と、学生の表現やアンケート結果による評価から、保育者養成における造形関連科目としての適切性を検討する。なお、分析対象とする授業は、2020年度の授業を想定していたが、2020年度は遠隔授業となったため、本稿で提示するのは、主に2019年度の授業内容とし、遠隔授業で実施できた改善点を、そのことを明記した上で加えて検討する。また、分析は複数判定の一致の確認によってなされるべきであるが、授業内容の詳細がわかる第三者の不在、本稿は移行に際しての課題抽出が目的であり、授業の妥当性の検証を最終目的としていない等から、筆者が単独

で行った。分析の観点は以下の通りである。

1. 「造形的な見方・考え方」の視点からの検討

教科等の「見方・考え方」の1つである「造形的な見方・考え方」の基礎的な理解ができるようになり、「造形的な視点」の萌芽を支えることができる「知識・技能」と物的環境構成力が獲得できる授業内容かどうかを検討する。分析の観点については、先行研究によって示されている「造形的な見方・考え方」の具体的内容¹⁹⁾が、小学校の図画工作から高等学校の美術までを含めて作成されているため、ここでは、小学校学習指導要領の解説文と〔共通事項〕から抽出された「造形的な見方・考え方」に関する文章に基づいて作成した(表3)。

表3 「造形的な見方・考え方」による分析の観点

観点〈1〉	「造形的な見方・考え方」
A 対象や事象(環境)との関わり方	ア 感性や イ 想像力を働かせる
B 対象や事象(環境)の捉え方	ア 形や色に気付く イ 形や色の感じ ウ 形や色などの造形的な特徴の理解
C 探究の仕方	ア 自分のイメージをもちながら、イ 意味や価値をつくり出すこと

なお、Cア「自分のイメージ」に多様性の容認、Cイ「意味や価値をつくり出す」には「見方・考え方」の拡大という「表現」の理解の基盤となる考え方の視点も含めた。

2. 「豊かな感性と表現」の視点からの検討

各領域のねらい及び内容に基づく活動を通して育まれる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である「豊かな感性と表現」を体感することができ、それを支える人的環境になるために有効な授業内容かを検討し、領域「表現」の理解につながる内容であるかを確認する(表4)。Cウの観点からの分析に、苦手意識の払拭に関する検討を含めた。

表4 「豊かな感性と表現」による分析の観点

観点〈2〉	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 「豊かな感性と表現」
A 対象や事象(環境)との関わり方	ア 心を動かす出来事などに触れ イ 感性を働かせる
B 対象や事象(環境)の捉え方	ア 様々な素材の特徴や イ 表現の仕方に気付き
C 探究の仕方	ア 感じたことや考えたことを自分で表現したり、 イ 友達同士で表現する過程を楽しんだりし、 ウ 表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる

3. 「幼児教育における見方・考え方」の視点からの検討

観点〈1〉による分析は、造形的な視点や知識・技能の修得の確認に偏る懸念がある。「見方・考え方」の接続の観点から、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」にふさわしい学びであるかの検討のために、幼児期における「見方・考え方」に沿っているかについても確認する(表5)。

表5 「幼児教育における見方・考え方」による分析の観点

観点〈3〉	幼児教育における「見方・考え方」
A 対象や事象(環境)との関わり方	ア 身近な環境に主体的に関わり, イ 心動かされる体験を重ね
B 対象や事象(環境)の捉え方	ア 環境との関わり方や意味に気づき, イ これらを取り込もうとして,
C 探究の仕方	ア 諸感覚を働かせながら, 試行錯誤したり イ 思い巡らしたりする

4. 学生による評価

上記の分析は、授業内容の検討であって、授業成果の検証にはならない。そのすべての成否を確認することはできないが、達成状況を読み取ることができる学生評価を取り上げる。学生による評価は、2019年度に実施した授業アンケート結果と2020年度の感想レポートと提出作品を用いる。造形関連授業の課題とした苦手意識の改善と「表現」を支える意欲の獲得については、2019年度のアンケート結果から検討する。なお、2019年度のアンケートについては、評価対象ではないとしたものの記名である点において客観性を欠くと考え、大学で実施した無記名の授業アンケート結果から「知的好奇心の触発」「難易度」「満足度」に関する項目を取り上げて検証する。「学生の表現」については、誌面の都合上、2020年度に授業改善を行ったために、文献から内容を確認できないもので、学生から掲載許可が得られたものについて取り上げた。

結果と考察

本授業は、テキストとして『保育をひらく造形表現』²⁰⁾を用いている。本書は、子ども達の表現を支えるための専門性の獲得を目指しており、以下のようなねらいをもった構成になっている。1章は造形表現の意味と意義の理解、2章は造形表現を支えるための感性や考え方の育成、3章は造形表現を支えるための造形的知識・技能の獲得、4章は子ども理解に資する表現の発達・個人差の理解、5章は指導方法の理解、6章はねらいに応じた保育実践例、7章は社会における広がり理解である。(内容の補足のため表内に該当ページ数を示した)

授業は、体験の提示と学びを深める講義や課題（事前事後を含む）の提示の両方を含むようデザインしている。また2019年度までの対面授業では、1つの机を囲む4、5人でのグループワークを重視し、アクティブラーニングの視点に立った授業を行った。

1. 3つの観点からの分析による授業評価

授業内容と分析結果を整理し、内容に合致する分析の観点を記載した（表6）。

表6 「図画工作」15回の授業内容と分析結果

*2020年度改善点

回	授業内容	造形的な体験内容 (数字はテキストページ)	講義・課題の内容 学びのポイント	分析の観点		
				〈1〉	〈2〉	〈3〉
1	点線形による表現	ワークシート（点線形、33） 1枚の紙から紙の形からのみたて45 切り紙遊び38	ワークシートで自己紹介 創造性とは表現とイメージ 切り紙の探究	Aア Bアイ	Aイ Bイ Cア	Cア Cイ
2	空間表現	木炭との出会い 明暗で立体表現35 透視図法で奥行き表現35 こする技法	明度のグラデーション 透視図法と写真と写実的絵画（ユトリロ）・シュールレアリズム（キリコ）の遠近法・子どもの空間表現・空気遠近法との比較 学びの確認 ワークシート 好きな絵を探す	Bアウ	Bイ Cウ	
3	心象と写実表現	イメージで表す「花」27 戸外で見て描く「花」 パステルとの出会い 鑑賞	2つの作品と子どもやシャガールの花の絵から考える「絵とは何か」 アサーションのワーク27 鑑賞の振り返りと多様性の理解	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bイ Cアウ	Aアイ Bイ Cイ
4	粘土：素材と触感	素材との出会い パルプ粘土（共同）130 小麦粉粘土39	食べ物を作る（共同でお弁当） 子どもと触感といい感じ（自分との出会い）129 触覚過敏とアレルギー	Aア Bアイウ Cアイ	Aアイ Bアイ Cイウ	Aアイ Cア
5	粘土：立体表現	愛着のもてる形作り	芯材（ペットボトル）をいかす 粘土の表現技能と用具	Aアイ Bアウ Cアイ	Bアイ Cアウ	Cアイ
6	表現技法1	スタンプing42、135 デカルコマニー133 ビー玉アート（スパッタリング、カラーシャボン玉、マーブリング、ステンシル、糸引き版画）	試みと表現 表現のアプローチ 野菜の形の美との出会い 見立てとイメージ 偶然性と意図性 表現技法の選択的体験*	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bアイ Cアウ	Aアイ Bア Cア
7	表現技法2	フロッタージュ20 スクラッチ136 スチレン版画43	触覚と視覚 不思議を楽しむ リサイクル素材の活用	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bアイ Cアウ	Aアイ Bア Cアイ
8	表現技法3	紙版画43、137 ローラー遊び（3原色と白、共同）44	版表現の魅力136 素材と刷り方の工夫 色との出会い イメージの交流と触発	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bアイ Cアイウ	Aイ Bア Cアイウ
9	色の世界	好きな絵の色分析* 3原色と虹のにじみ絵36 はじき絵 愛着のもてる色作り	色相番号とトーン記号の意味 色相環とトーン トーンとイメージ 粘土の仕上げ	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bイ Cウ	Aアイ Bア Cアイ

10	色と心	色の家族のワーク グラデーション作り* 染め紙 (愛着のもてる色作り)	色彩心理25 色の効果37 イメージの染め紙37 (粘土の仕上げ)	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aイ Bアイ Cウ	Aアイ Bア Cアイ
11	メッセージ カード	心のメッセージカード*46	色と形で思いを伝える 表現技法や色の学習, 紙の技法(し かけ)をいかす 子どもの作品に学ぶ	Aアイ Bイウ Cアイ	Bイ Cアウ	Aア Bア Cアイ
12	工作:箱と 素材	箱で表す, 箱の中に表す*56	素材探しと環境との対話 自然素材の活用58 接着(ボンド, グルーガン) 着彩技 能 子どもの作品に学ぶ	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aアイ Bアイ Cウ	Aア Bアイ Cアイ
13	コラージュ: 個人	コラージュ表現(自分の好き な世界)61 粘土作品鑑賞	自分との出会い 他者との出会い よさの発見	Aアイ Bアイウ Cアイ	Aイ Bアイ Cアウ	Aア Bア Cアイ
14	コラージュ: 共同	イメージの共有とコラージュ 表現(共同)60, 61, 62	ローラー遊び画面からの見立てとコ ラポレーション体験 ブリコラージュ体験	Aアイ Bイウ Cアイ	Aイ Bアイ Cアイ ウ	Aアイ Bアイ Cアイ ウ
15	コラージュ: 共同 発表・鑑賞	コラージュ表現(共同)	多様な素材の特性 表現を見合うことによる学びと価値 への気付き	Aアイ Bイウ Cアイ	Aイ Bアイ Cアイ ウ	Aアイ Bア Cアイ ウ

以上から、本授業は、15回の受講によって分析に用いた観点のすべてが満たされることが明らかになった。ただし、観点〈3〉「幼児教育における見方・考え方」に合致しない第2回授業内容については、「領域に関する専門的事項」への移行に際して省くことを検討したい。最も多くの項目数に適合した第8回の授業は、前回の授業で作ったりサイクル素材を用いたスチレン版画の版と事前課題で作った紙版画の版を印刷し、多色や混色での印刷を試みた後、廊下に模造紙ロールを設定して、グループ単位で自由にローラー遊びをするという内容である。同じ項目数であった第14回は、そこでできた画面のグループでの見立て等からイメージを広げ、教室内の材料を自由に使ってコラージュ表現をするという内容であり、ブリコラージュの視点の獲得も目指している。いずれも共同的探究を含み、観点〈2〉Cイに合致しているが、その観点に適合する授業は4回であることから、移行に際して、共同による表現機会を増やしたい。表現領域は、造形分野に限定されないことから、共同的探究を、身体的な表現(動く・演じる)や音楽的表現(奏でる・うたう)を含む総合的な造形表現活動にするなどの改善が考えられる。

また、「B対象や事象(環境)の捉え方」については、観点〈1〉Bは「造形的視点」、観点〈3〉Bは「ア環境との関わり方や意味に気付き、イこれらを取り込もうとして」というように観点による違いが大きい。比較すると、観点〈1〉Bを主とした授業内容が多い一方、観点〈3〉Bイを内容に含む授業は3回であった。気付きや捉え方の工夫は、図画工作

の「造形遊びをする活動」の理解にもつながることから、さらに重視する必要がある。幼児教育の観点である〈2〉〈3〉が全体として表現過程の前半部分を重視していることから、さらに授業内で取り上げるようにし、子どもの表現や作品についても、乳幼児期の素朴な表現の姿に関する事例を増やしたい。また、1回の授業に複数の活動があり、1つの活動の探究時間が少ないことから、15回で行うためには内容の精選と事前事後課題の活用が一層求められる。その点は、「保育内容の指導法」の科目と合わせて検討する必要があるだろう。

分析の結果、全体として、多様性の容認や見方・考え方の拡大等「表現」の理解につながる観点〈1〉Cや苦手意識の払拭につながる観点〈2〉Cウに適合する授業であることが示された。意識変革には情動が伴われることが望ましいと考えたが、ほとんどが、感性が働き、気付きが生まれる出会いと対話のある授業であることについても確認することができた。これらについては継続していきたい。



2. 学生の表現とアンケート結果による授業評価

3つの観点からの評価は筆者が意図した授業内容に対して行ったことから、実際の学修成果について、学生の評価から検討する。各回の評価については、14回目の授業に内容一覧を示し、〈A：学び（知識・技能）があった、B：工夫が生まれ夢中になれた、C：よりよくしようと思えた、D：作品に愛着がもてた〉について当てはまる欄にチェックをするという方法で行ったアンケート結果から検討する（2019年度実施、複数回答可とした）。作品や自由記述については、テキストで参照できない学習内容の学生作品と学習成果の理解につながる自由記述を取り上げる（2020年度）（表7）。

表7 「図画工作」15回の授業内容と学生による評価（回答数53）

*2020年度改善点

回	内容	体験と講義・課題	学生の表現 作品または「自由記述」	アンケート結果				
				A	B	C	D	計
1	点線形による表現	・ワークシート(点線形)1枚の紙から紙の形からのみたて切り紙遊び	「1枚の紙から多様な表現が生まれる過程を通して、想像力や表現力を高めることができると感じた。さまざまな形を作るために、折り方や切り方を工夫して制作することが必要であることから試行錯誤を重ねた。一枚の紙に無我夢中に切り込みを入れることで、紙を開いた時の感動や作り上げた時の達成感を得ることができた。」	36	33	27	21	117
2	空間表現	・明暗で立体、透視図法で奥行表現 木炭との出会い この技法	「深くこだわって何かをするということが私は苦手です。けれどもやり方を知ればできるようになって楽しくなるんだと改めて思いました。」「影のつけ方や木炭を使っている表現は、今までより深くやることができたのでたいへんよい学びとなった。」	44	30	31	20	125
3	心象と写実表現	・イメージで表す花、戸外で見て描く花 作品共有と違う角度から見る体験 パステルとの出会い	「イメージ画を気に入っている。花や葉の配置を自分で考えたり、イメージと違って何回も描き直したりしたため、思い入れがこちらの方が強い。」「写生画。理由は、実際の花を観察するなかで花びらの1枚1枚や葉や茎の細かな色など、今まで目もくれなかった部分に気づくことができたからである。絵を見ることで、その時の驚きや感動を思い出すことができる。」「作品共有で少し自分に自信をもつことができました。」	32	29	36	29	126

4	粘土／素材と触感	素材との出会い ・バルブ粘土 (共同) ・小麦粉粘土	「バルブ粘土：本当に粘土のようになったので驚いた。簡単にできて、とても楽しい。」「小麦粉粘土：水と小麦粉を混ぜていくときに混ざっていく感触や冷たさなどを手で味わいながら行うことができて楽しかった。」	30	33	33	<u>37</u>	133
				<u>37</u>	33	26	28	124
5	粘土／立体表現	・愛着のもてる形作り (紙粘土)	「自分がやりたいように表現できて自分らしさを感じることができました」「最初図工は憂鬱だったけれど、上手下手ではないことに気付くことができた。作品に愛着を持てるようになってからは図工が楽しくなった。」	28	33	32	<u>43</u>	136
6	表現技法 1	・スタンピング (試みと表現) ・デカルコマニー ・ビー玉アート等 (表現技法の選択的体験)*	「スタンピングが気に入っているポイントは下のほうにある草を表したフォークのスタンピングです。試みの時に使ってみてあまり使うことはないかなと思っていました。しかし作っているうちにどんどん使うものが増えていき、フォークも使えると思った時にはうれしくなりました。また、表現した時には試みでは表すことのできなかったフォークの良さや使い方ができ、お気に入りポイントになりました。色合いの特徴は黄色と青の花火で色相環が反対になるようにしました。色が重なるようにおしたり、同じ色でも濃い色や薄い色の差をつけたところが特徴です。」	<u>35</u>	34	29	24	122
				30	<u>35</u>	25	21	111
				/	/	/	/	/
7	表現技法 2	・フロッターージュ ・スクラッチ ・スチレン版画	「フロッターージュのカラーージュ作品。細かい模様だけれど、良く見ると様々な模様が使われているところがお気に入りのポイント。彩度の低い寒色を使うことで、冷たい色だが優しい雰囲気を感じられるようにした。」「スクラッチは模様を描くだけで幻想的な表現ができる。曲線を描くことで色が段々と変わっていく様子がとても綺麗に感じられる。色相のグラデーションを考慮し、より幅広い色合いの表現が生まれるようになっている。」	<u>35</u>	29	30	25	119
				32	<u>33</u>	26	23	114
				30	28	<u>35</u>	18	121
8	表現技法 3	・紙版画 ・ローラー遊び (共同)	「私がこのような自由な授業を受けていたら、最初から苦手意識を持たずに済んだのかなと思いました。」	33	<u>37</u>	32	36	138
				30	<u>41</u>	30	32	132
9	色の世界	好きな絵の色分析* 虹のにじみ絵 愛着のもてる色作り	「普段何気なく、自分が好んでいた色は薄い色ですが、自分はなんで好きなんだろうと考えた時にやわらかい感じが好きなんだということが気が付きました。」「色は無限にあると感じた。」「自分がなぜその絵画に惹かれたのかという理由に関係することを知ることができ、とても有意義な時間となりました。」	/	/	/	/	/
10	色彩と心	色の家族のワーク グラデーション作り*	 (用いるのは、絵具でも日用品でも自然物でも自由とした)	/	/	/	/	/
11	メッセージカード	心のメッセージカード* ・色形と技法についての学びをいかして思いを伝える ・しかけを取り入れる		33	<u>39</u>	34	34	140
				(2020年度は2019年度と課題設定が若干変更になった)				

12	工作／箱と素材 ・箱で表す，箱の中に表す* ・箱から発想する実践資料を参考にする ・素材を身近な環境から探す（自然素材を含む）	（箱の形から発想するか中に作るかを選択した。写真は学生作品「からくりハウス」）		
13	コラージュ／個人 コラージュ表現（自分の好きな世界）立体作品鑑賞会	「雑誌から，好きな写真や形を見つけて切り取るという1つ1つの作業も楽しみながら行うことができた。完成形を頭の中でイメージしながら取り組んだことで作業がスムーズに進み，納得のいく作品を作ることができた。」	28 38 35 39 140 (2019年度は表紙にコラージュした場合はブックカバーをした)	
14	コラージュ／共同 イメージの共有とコラージュ表現（共同）	「グループ活動だったので，友達と協力，高め合いながら授業を受けることができ，座学より深い学びができた。」	27 35 36 33 131	
15	コラージュ：発表・鑑賞 コラージュ表現（共同）	「コミュニケーションを取りながらお互いの意見を尊重することがとても楽しかった。図画工作の授業が終わってしまうことがとてもさみしいです。」	/ / / / /	

以上から，合計チェック数についてはすべての活動が半数以上あり，特に学習成果が乏しいと思われる活動はなかった。相対的に評価が高い（総チェック数が多い）活動は，メッセージカードや個人コラージュ等，自分のイメージを探究する内容のものであり，各回の4項目中最も多いチェック数に下線を引いたが，「A：学び（知識・技能）があった」が最も高い授業内容は相対的に評価が低い傾向があった。7割以上の学生のチェックがあった項目は太字にしたが，共同的探究のある活動が多く含まれていた。

また，授業全体についての評価は，アンケート用紙内に授業冒頭で授業目的を説明する際に用いた「表現の過程図」を再度示し，受講によって受講前よりできるようになった，向上したと感じる言葉にチェックをするという方法で調査した。

表8 「図画工作」の受講によって向上したと感じると回答した割合（回答者数53名）

自分を感じる楽しさ	他者との共感の喜び	表現しやすい自分	自分の世界の充実	世界のひろがり・つながり	自信	技能	意欲	創造性	知識
58%	62%	60%	70%	62%	47%	55%	85%	75%	64%

以上から，85%の受講者が表現意欲の向上，75%が創造性の高まりを感じ，70%が自分の世界の充実を感じたことが明らかになった。この結果には，「活動や作品をつくりだすこと

は、自分にとっての意味や価値をつくりだすことであり、同時に、自分自身をもつくりだしていることである」²¹⁾ という図画工作科が大切にしていることが表れており、保育者としての資質の育ちにもつながっていると考えられる。ただし、「自信」については半数にとどまっており、授業成果として苦手意識の克服が実現できたと結論づけることはできない結果であったが、一定の成果は認められた。なお、2020年度の遠隔による「図画工作」の授業後のアンケート（回答98名）において、図工・美術に対する気持ちが、受講前より肯定的になった割合は約94%であった（図2）。

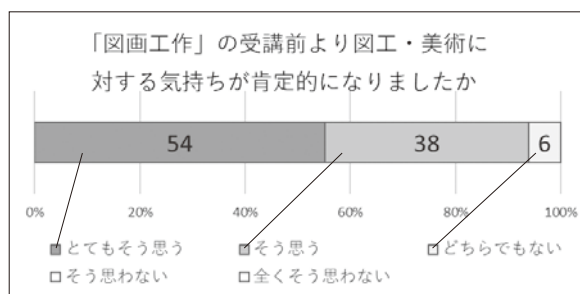


図2 「図画工作」受講後の図工美術に対する感情の変化

3. 大学で実施した授業評価（2019年度実施）の結果

授業内アンケートは、評価外と記したが、筆者が回収し、記名もされていたため、肯定的になる傾向があると考えられることから、教員が教室から退出して実施する、無記名の授業アンケートの結果を示す。本稿に関連する項目については以下の通りであった。

表 授業アンケート結果 (%) * 4クラス開講になっているため、各クラスの結果を平均した、回答者数88名

2019前期 図画工作 A～Dクラス平均	大いにそう思う	そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	
●この授業を通して知的好奇心を刺激されましたか	81.1	18.9	0	0	
●この授業を受講して満足していますか	83.2	15.2	1.6	0	
	難しい	やや難しい	適切	やややさしい	やさしい
●あなたの授業内容の理解において難易度は適切でしたか	0	2.1	91.4	6.5	0

以上により、全員が知的好奇心を刺激されたと回答し、98%以上が満足していたことが明らかになり、91.4%が、難易度が適切と回答していた。この結果によって、授業評価としてとりあげた記述が肯定的であったのは、偏った選出ではないことが裏付けられる。

4. 保育者養成に必要な造形的体験とは何か

以上から、筆者が「教科に関する科目」として行ってきた「図画工作」は、改善の余地はあるものの、全体として「表現」の「領域に関する専門的事項」の授業としても適切なものであったといえるだろう。筆者は、「造形的な見方・考え方」を働かせる体験によって環境との出会いと対話を重ね、自分の感じ方を深めて表現に対する抵抗感を軽減し、共に気づき、創造する楽しさを味わうことが、幼児期の素朴な表現を支える専門性の獲得に必要であると考えられる。乳幼児期の表現は、身体や「もの」を媒体とすることが多いため、造形的視点によるコミュニケーション力は必要な専門性である。現実世界をより広く感じ取る感性と視野を育み、より深く捉え、よりよく変えていく知性と創造力を養う造形関連科目が、保育者養成教育に必要なのではないだろうか。小学校以降の教育に接続する学びとして重要なのは、各教科の特徴的な「見方・考え方」そのものではないことは自明であるが、「領域に関する専門的事項」を「各領域に関連する学問分野を専門とする者が担当する科目」とする背景には、こうした期待があると考えられる。保育者養成課程において、深い学びの糧となる多様な「見方・考え方」を体験し、それらを身に付け、自身の視野を広げることは、豊かな保育内容を展開する際の糧となるだろう。

5. 領域「表現」の学問的背景

最後に、未解決の課題について考察する。領域「表現」の学問的背景についてである。筆者は、ネルソン・グッドマン (Nelson Goodman, 1906～1998年) の理論に基づき、芸術教育の意義は「芸術世界の理解を前進させることは言うまでもなく、同時に芸術も含めた現実世界のパースペクティブを拡大させる点」にあるとする論考から大きな示唆を得た²²⁾。この考え方は、統合カリキュラムの検討に際して提示されたものであるが、「教育活動全体の機能が何よりも現実世界についての我々の認識の拡大、前進にある」と捉え、「芸術の価値は、解釈、文化の多様性を容認し、芸術も含めた現実世界のパースペクティブを飛躍的に拡大させるところにある」とし、芸術の革新性や創発性において、その存在を価値付けている。グッドマンは、「芸術と科学は等しく人間が共通に持っている性向に根ざしたもので、「シンボルを読み解いて世界に関する知識を獲得しようという、人間が人間である限り決して失うことのない無限の欲求に由来する」とし、表現は、「多様性と新奇性を保証する構造をもつことによって、その目的をよりよく果たすものとして位置づける」という考え方を示し、「美的態度とは不断の探究・検証である」と述べている²³⁾。領域「表現」は、幼児期の表現の多様性と新奇性を保証し、「美的態度」の萌芽を支える役割を担っていると考えられる。鳥光 (2010)²⁴⁾ は、芸術教育の目的は「理解の前進」であり、それによってもたらされる喜びが配当金とするグッドマンの審美主義的な目的設定にためらいを示しながらも、グッドマ

ンの提唱する理解の哲学を教育の哲学として解釈し直す必要性について論じている。芸術教育の意味を問う議論を含む学問こそが、芸術分野を分けずに表現の意義を捉えようとする「表現」領域にとって、その背景となり得るものと考えられる。

まとめと今後の課題

教職課程認定基準の改正による授業科目の変更は、保育者の養成段階にいる学生にどのような影響を与えるのであろうか。「教科に関する科目」の履修がなくなり、「図画工作」「音楽」等の芸術系科目について、履修の必要がなくなることは大きな変化である。同じ授業時間数を「表現」の「領域に関する専門的事項」の科目で確保した養成校もあるが、削減した事例もある。15回を芸術分野ごとに回数を分けて行う授業や表現方法の混合を体験する授業、総合的表現を体験する授業等への変更が想定されるが、実施後の学習成果の検討が必要であろう。変更の影響については、小学校の教科等とのつながりの理解が深まり、「保育内容の指導法」との関連づけが改善されたのかを含む多様な観点からの検討が求められる。また、筆者自身が本研究の結果に基づいて、より「表現」領域の学びにふさわしい「領域に関する専門的事項」の授業デザインをすることが課題となる。

幼児教育は、「養護」と一体的に行われるが、「生命の保持」と共に「情緒の安定」が「養護」の柱となっている。「保育所保育指針」には、「情緒の安定」のねらいとして「一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする」「一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする」と明記されている。養成課程において学生自身が表現を受け止め合う体験をして、安心して表現を楽しむようになり、夢中になって表現する体験をすることは、保育そのものの理解のためにも必要なのではないだろうか。子どもの最善の利益を考え、表現する権利を守る保育者を養成するという視点からも、人間にとっての表現の意味の理解を伴う芸術関連科目の充実が望まれる。

謝 辞

作品等の掲載を了承いただいた学生の皆さんに感謝致します。

文 献

- 1) 厚生労働省 2017 保育所保育指針〈平成29年告示〉フレーベル館
- 2) 文部科学省 2017 幼稚園教育要領〈平成29年告示〉フレーベル館
- 3) 内閣府、文部科学省、厚生労働省 2017 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈平成29年告示〉フレーベル館
- 4) 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子 2017 ここがポイント3法令ガイドブック フレーベル館 P94
- 5) 文部科学省 2018 小学校学習指導要領〈平成29年告示〉日本文教出版

- 6) 文部科学省 2017 教育課程部会 幼児教育部会 (第9回) 配付資料 資料1 幼児教育部会
取りまとめ (案) 別紙
- 7) 文部科学省 2018 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 図画工作編 日本文教出版 P4
- 8) 文部科学省 2017 新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そし
て実施へ— P24
- 9) 文部科学省 2016 教育課程部会 教育課程企画特別部会 資料3 幼児教育部会における取
りまとめ (案) P3
- 10) 前掲7) P11
- 11) 前掲7) P9
- 12) 文部科学省 2017 教職課程コアカリキュラム (平成29年11月17日, 教職課程コアカリキュラ
ムの在り方に関する検討会) P8
- 13) 文部科学省 2017 法令改正及び教職課程の認定の概要
- 14) 無藤崇代表 保育教諭養成課程研究会 2017 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか 萌文書
林 P11
- 15) 前掲14) P12
- 16) 内田裕子・大岩幸太郎 2019 形の学習のための教材及びカリキュラムの検討・開発 埼玉大
学紀要 教育学部, 68(1):47-62
- 17) 末永幸歩 2020 13歳からのアート思考 ダイアモンド社
- 18) Y. シャラン 2001 協同による総合学習の設計 北大路書房
- 19) 内田裕子・大岩幸太郎 2019 「造形的な見方・考え方」の学習法開発への試み 埼玉大学紀要
教育学部, 68(2):269-290
- 20) 槇英子 2018 保育をひらく造形表現 (第2版) 萌文書林
- 21) 前掲7) P11
- 22) 吉野秀幸 1998 芸術統合型カリキュラムの構成原理に関する研究—N.Goodmanの芸術認知
理論を応用して—日本教科教育学会誌第21巻第3号 35
- 23) 渡辺裕 1985 芸術による世界認識:ネルソン・グッドマンの『表現 (expression)』の理論を
めぐって「東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究」第3号 P116
- 24) 鳥光美緒子 2010 ネルソン・グッドマンとプロジェクト・ゼロ (1967-1971) —芸術・教
育・研究に関するグッドマンの概念をめぐって— 教育学論集52, 79-107

Arts and Crafts Experience Necessary for Students Taking Nursery School Education Courses:

Specialized skills related to the field of artistic expression through an artistic
viewpoint and philosophy

MAKI, Hideko

The purpose of this study is to clarify the necessary art experiences for the students who are going to be nursery teachers.

To examine importance of experiences, I evaluate contents of subject in arts and crafts class in early child education.

The point of evaluation is an appropriate transposition from expert skill and knowledge to the subject. I analyzed in three points of view, connection to elementary school's art and craft, field of 'artistic expression' in early child education, and early child education.

I consider the evaluation of class by students in addition.

Through evaluation by students, all points in whole classes are appropriate.

Students are becoming positive for art expression and getting high satisfaction.

The issue is improving incline to art and craft.

Through analysis, it is clarified that necessary experiences are an art expression which accompany thinking "artistic viewpoint and philosophy", encounter of environment and conversation with others, deepen sensibility, lowering the resistance, enjoying the creation with others.